



artful\_settaya\_003\_calligraphy

摂田屋の書

MfG\_J\_calligraphy\_and\_art\_in\_Kina-Saffron\_Shuを編集

摂田屋の書は、こんな順番で、お話しします。

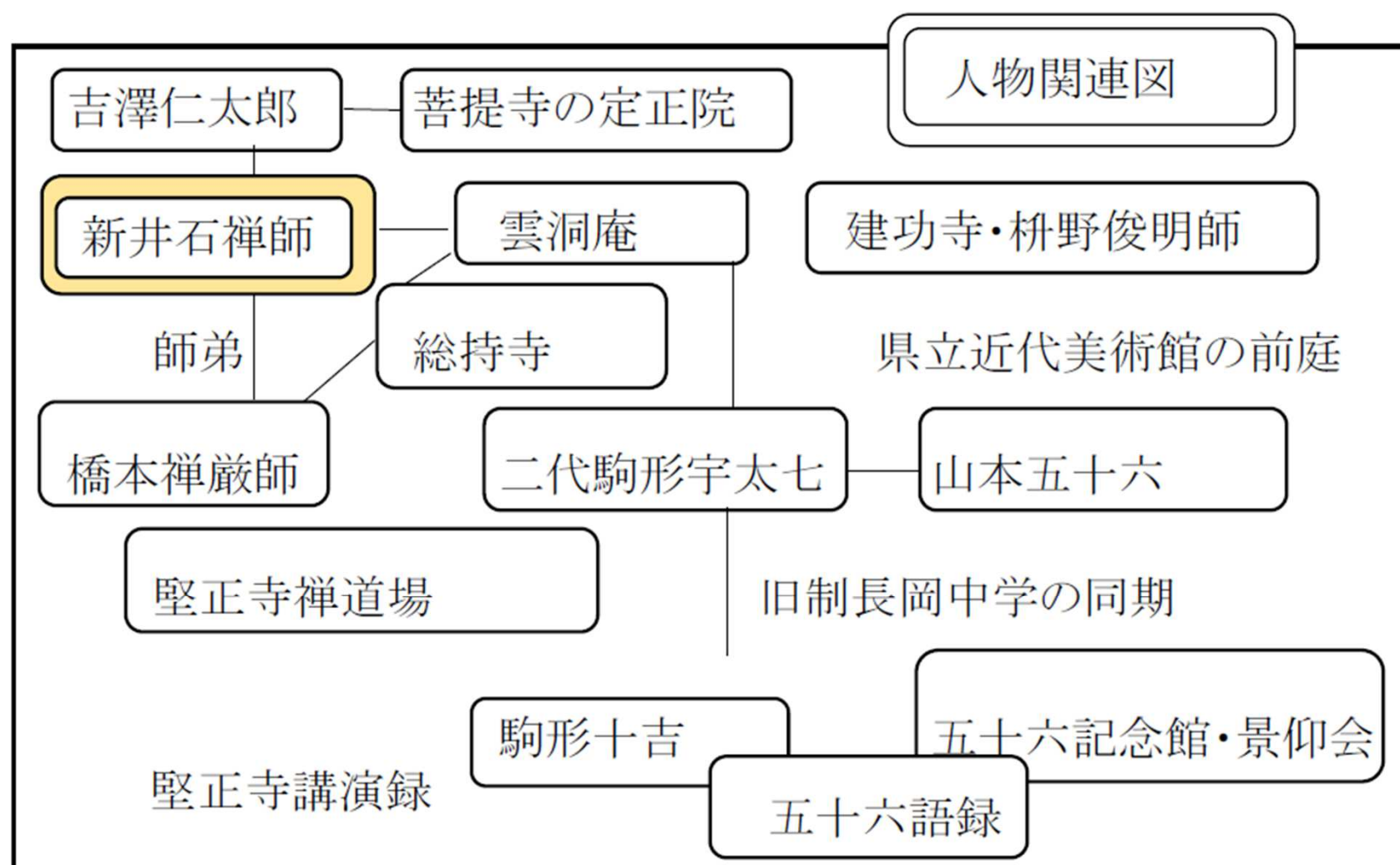
- ① サフラン酒 離れの書 新井石禅の書
- ② サフラン酒 離れの書 その他
- ③ 星六 中川一政の書
- ④ 吉乃川 天下甘露泉、極上吉乃川
- ⑤ 星野本店土蔵の扉に記された書

番外編 サフラン酒 離れの書 藤田東湖の書

# 雲洞庵から始まった新井石禅師と長岡のご縁

最初は、明治・大正期の曹洞宗の高僧の書です。  
書の意味するところは、仏教の教えの凝縮とも云える、  
三法印の諸行無常、諸法無我、涅槃寂静だと思います。

若い時に魚沼の曹洞宗古刹の雲洞庵の方丈に就任したのですが、そのことが、後に、長岡に多くのことをもたらしたということで、たいへんな縁を有する。



## 新井石禅師～橋本禅巖師～駒形宇太七・十吉氏のご縁

- 魚沼に室町期、曹洞宗古刹の雲洞庵、開創。
- 新井石禅、若い時に、雲洞庵方丈に就任
- 石禅、寺格No2の足柄山・最乗寺方丈に就任  
橋本禅巖、最乗寺にて石禅に師事。
- 石禅、本山總持寺に移り、禅巖も總持寺行きに従う。
- 石禅、本山總持寺管首に就任  
石禅示寂の後、禅巖は總持寺を辞し、雲洞庵で教師
- 駒形宇太七、長岡悠久山の新しい禅道場の方丈をスカウトに  
雲洞庵を訪問、橋本禅巖師を推挙される。  
(宇太七と山本五十六、旧制長岡中学でクラスメート、親友)
- 禅巖、禅道場・堅正寺の方丈に就任。宇太七死去。
- 山本五十六、宇太七の弟、十吉の紹介で、度々堅正寺で禅巖と語り合う
- 禅巖、講演で、五十六の言葉を披露し、それが講演録に残った。
- 駒形十吉、山本五十六元帥景仰会初代会長就任、記念館建設に尽力
- 開館した山本五十六記念館に、その「五十六語録」が掲示

「やってみせ言ってみせて聞かせてさせてみせほめてやらねば人は動かじ」、これは山本五十六が堅正寺で行なった講演のなかで語ったとされる。  
橋本禅巖師の記録になる「講演録」の中に辛うじて残り、今や企業人の人材育成に伝わっている。

なんという奇跡。

新井石禅(1865年- 1927年)

曹洞宗専門本校(現、駒澤大学)に学び、わずか3年で卒業。

雲洞庵、護国院、最乗寺などに歴住し、曹洞宗大学林学監兼教授、教学部長、永平寺副監院となり、總持寺西堂を経て

大正9年(1920年)に独住5世、曹洞宗第11代管長となる。

国内、海外の巡教は数百か所に及び、その徳化は一世を風靡し、生き仏と仰がれた。

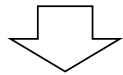
曹洞宗管長の任期は2年、大本山永平寺貫首と大本山總持寺貫首が交互に就任する。

新井石禅師は、曹洞宗の高僧で、サフラン酒の離れに、  
当主の仁太郎さんに送った書があります。  
魚沼の方の話では、「魚沼には石禅さんの書がたくさんある。  
我が家にも、ある、というお宅が多いんです。」ということの  
ようです。  
もう少し、石禅さんにスポットをあてたい、長岡の人にも  
知ってほしいということから、「長岡のご縁」を切り口に、  
作成しています。



左の“やって見せ”の語が  
世の中に残ったのは

右の書の新井石禅師から続く  
「縁」あったれば、こそ。



まさに奇縁・奇遇の重なりです。

やって見せ 説いて聞かせて やらせてみ  
讃めてやらねば 人は動かぬ

山本五十六 堅正寺 講義録 (橋本禅嚴記)

心は大山の如く、風を受け、動ず、量る大徳  
如く、衆流を容れて、涌き、人生を導き、観る大悲心  
苦しみし事、悟りて、花もあれば、実もなり

大正十年四月吉澤武彦

徳清庵の主人

新井石禅の書に  
もう少し、お付き合いください。

心は大山の如く 八風を受けて動ぜず  
量是大海如く 衆流を容れて漏さず  
人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しみもなし  
萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ

量(かさ)、衆流(しゅうる)と読みたいと思います。

心は大山の如く八風を受け動ぜず量は大海  
如く衆流を容れて漏さず人生を夢と観れば悲しみも  
苦しみもなく萬事を空と悟りてこそ花もあれ実もあれ  
大正十一年四月吉澤八郎 読了る迄

「八風（はっふう）」とは人を正常から異常へ、  
歡喜から絶望へ、善から悪へと誘う、八種類の風を言い、  
龍樹の『大智度論』にある言葉とのこと。  
これら愛憎の状態が、好む・好まないという気持ちに執着し、  
人の心を動揺させ、惑いを起こさせるのです。

大海のような広く深い心を持ち、一方に偏った  
考えをせず、ひとつの思いに固執することのない、  
おおらかな心で生きましょう。」（典座教訓）

こんな受け取り方も許されるのでは、ということで下記。

『今までの人生には、様々なことがあったことでしょう。  
その中には、あなたにとって、うれしいことも多かったでしょうが、  
良いことばかりでなく、辛いことも悲しいこともたくさんあったに  
違いない。

でもね。このあとの後生の年月に比べたら、人の世は、あっという  
間です。更には見方次第で、あれがよい、これが悪いなどと  
いうことは、ないのです。悲しみ、苦しむことは、ないのです。』

～ 「人間万事塞翁が馬」という言葉もあります。  
後生の一大事

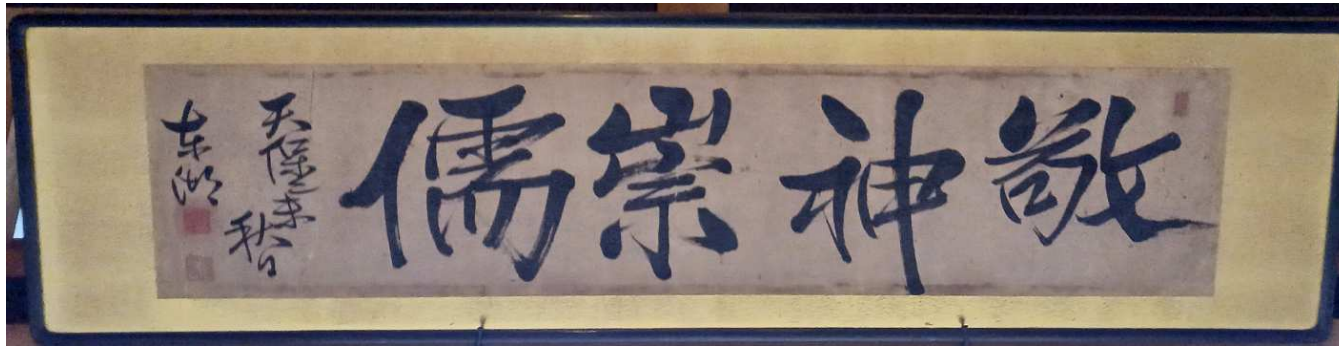
こう受け取ると、次の「萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ」を抵抗なく受け取れるように思います。～ そうすると、この人の世を、「夢のように短い年月」と捉えられるか否か、がポイントになりそうです。

萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ

空を「空っぽ」と捉える見方もあるようですが、ここでは「諸行無常」、絶対に 変わらないということはない、絶対的に確かなものは何一つない、と捉える方が適切なように思います。要は、絶対というものはない。こだわりを捨てなさい、ということ、云っているのだと解釈したいと思います。

そして、「花もあれ実もあれ」とは、辛い今を生きる意味もある、と諭しておられ、これは宗派によらず、仏教共通の姿勢のように受け取れます。

② サフラン酒 離れの書 その他



水戸学派の師 尊王攘夷派の若者に師と呼ばれた、藤田東湖らしい言葉 と思います。

## サフラン酒 離れの書 その他



三条出身の陸軍大将、鈴木莊六の書。

吉澤仁太郎に宛てた書  
「酒、心に満」と読めそう。



### ③ 星六 中川一政の書





画壇の三筆 中川一政の書です。

2021年11月28日まで、富山県水墨美術館で  
「画壇の三筆」展が開催されました。

明治・大正・昭和の日本の近代美術の展開のなかで、ほぼ同時代を  
生きた熊谷守一、高村光太郎、中川一政の3人の芸術家です。

この三人は、画壇の三筆として知られています。

#### ④ 吉乃川 天下甘露泉、極上吉乃川



## 天下甘露泉、極上吉乃川

清水寺前管主の大西良慶師の「天下甘露泉」、現管主の森清範師の「極上吉之川」の書。

仕込み水に使う、代々守ってきた3本の井戸の深さは10メートルと浅い。長岡の東側にそびえる東山連峰の雪解け水と、西側を流れる信濃川の伏流水が交わる水脈はミネラル分の少ない、やや軟水という酒造りに適した水を蔵に与え、吉乃川の味わいを育ててきた。1945年8月の長岡空襲の後、大西氏が長岡市を訪れた際、吉乃川の創業家である川上家が投宿地を提供したのを契機に、清水寺との結びつきが強まったそうだ。森清範師は、今年の漢字一文字のお坊さん。

⑤ 星野本店土蔵の扉に記された書

この書を揮毫したのは、どなた？

証拠が全くないため、ここに示すのは慎みますが、傍証を含め、ガイドでお話しします。おそらく、そうだと思います。



## 補遺 藤田東湖の書「敬神崇儒」

現在、拝観禁止になっています、サフラン酒 離れ二階に、幕末水戸藩の思想的リーダであった藤田東湖の書があります。尊王攘夷派の若者に師と呼ばれた、東湖らしい言葉です。人それぞれには、天から与えられた「天命」があり、それに従って人は生きているのである。だからこそ、人はまず天＝神を敬うことを目指すべきである、という意味のように思います。

幕府には海岸防禦御用掛として出仕。長岡藩11代藩主の牧野忠雅が老中・海防担当を退いてからのよう。海岸防禦御用掛は、1853年のペリー来航に際して強化され、水戸藩主徳川斉昭を海防参与に推戴し、水戸藩からは斉昭の腹心である藤田東湖らを同じく幕府の海岸防禦御用掛として迎えた。1855年に発生した安政の大地震に遭い死去。

